

アメリカ白人労働者階級の母子間会話にみられるTeasing Interaction

——第一言語習得から公立小学校での英語教育導入を考える——

太田晶子

0. はじめに

本研究は、Miller (1986) “Teasing as language socialization and verbal play in a white working-class community.” をもとに、アメリカ白人労働者階級の母親達の持つ価値観を探究し、英語とその言葉の背景にあるアメリカ社会の価値観を改めて考察するものである。また、第一言語である日本語と同時に、日本の社会の価値観も学びつつある日本の子供達の立場に立ち、公立小学校での英語教育導入を考えてみたい。

1. Miller (1986) より、アメリカ白人労働者階級の母親達の持つ価値観を考察する

ここでは、まず、Miller (1986) の論文を紹介する。

1.1. 目的

最初に、Millerが研究しようとしたことを箇条書にすると次のようになる。

- ・白人労働者階級の母親達（以後、母親達）が言語や社会に対して持っている信念 (belief) や価値 (value) は何か。
- ・母親達は未熟な言語の使い手である子供達にどんな言語社会化ストラテジーを使っているか。
- ・母親達の信念や習慣は言語習得にどのように影響しているか。
- ・子供達のコミュニケーション能力の発達のどの側面がteasingの遊び心に活かされているか。

彼女は、自らの研究の目的は、ある都市の労働者階級で習慣的に行われているteasing（からかい）を調査することにより、これらの疑問を考察することであると述べている。

私の本研究では、特に、第一番目の母親達の信念や価値観、そして、第三番目のそれら価値観の子供達への影響に焦点をあててteasingを見ていきたいと思う。

1.2. 対象

Millerのteasingに関する研究は、メリーランド州サウスバルティモアにおける初期言語発達研究の一部であり、対象となったのは、そこに住む8歳から12歳までの学校教育のみを修了した3人の母親（うち、2人は公的扶助を受け、1人は工場で働いている。）とその第1子（すべて女の子）である。ちなみに、サウスバルティモアは、ドイツ人、ポルトガル人、アイルランド人、イタリア人、アパラチア地方人の混合社会である。

参考までに母子の名前と観察期間中の子の月齢を次にあげておく。

母 Marlene
Liz
Nora

子 Amy (19-22 months)
Wendy (24-27 months)
Beth (25-28 months)

子供達の発話の長さの平均は、1.5から2.2形態素ということで、だいたい、1語発話から2語発話への移行期と考えられる。

1.3. 方法

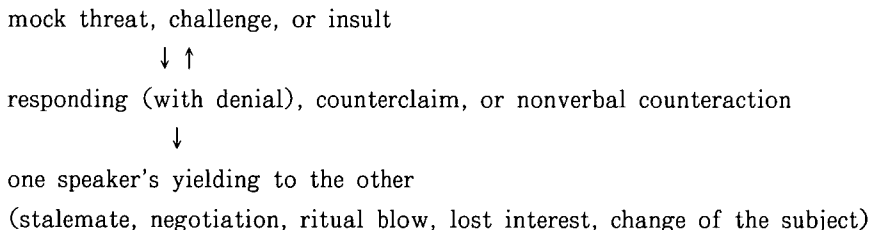
Millerの研究は、長期的な構想のもとに、民族誌学的アプローチをするものであり、具体的には、それぞれの子供達が、primary caregiverである母親や他の家族と、自宅であるrowhouseの居間で過ごしている時に12回にわたるビデオ録画を行い、あわせて、母親達には、研究中、定期的にインタビューをしている。つまり、子供をとりまく大人達と子供との日常会話の徹底的な観察と、家族の持つ信念や価値観の調査とを結び付けた研究と言える。

1.4. 結果

母親達は、teasingの中で、＜社会的知識＞と＜言語知識＞を同時に獲得する機会を子供達に与えている。言いかえれば、teasingにはlanguage socializationとしての働きがあり、子供達はteasingを通して言葉を学び、社会を知るのである。

ここで、teasing interactionについて、少し説明を加えたい。日常会話の中で突然おこるteasing interactionを他の会話と区別する特徴的なTeasingの流れというものがある。次のチャートは、Millerが、論文中、文章中、文章で述べていることを、私が独自に図式化したものである。

Teasingの流れ



見せかけの脅しや挑発によりteasingが始まり、それに対する反撃の言葉やアクションが起こる。このやりとりは1回以上何回か続き、最後はどちらかが屈することによりteasingは終わる。その終わり方は、どちらかが行き詰まったり、和解したり、時には暴力で解決したり、はたまた話題がどこかにそれたりと様々である。

次にteasing interactionの具体例をMillerの論文より引用した。

Example (Miller, 1986, p.202)

Amy II, 19 months

Amy

Marlene (mother)

[A has been drinking
M's soda]

gimme cup/

[A reaches for cup in
M's hand]

[M gazes at A, pushes
A away with fist
against A's belly]

[A returns M's gaze]

[A smiles]

[A raises fist toward mm/
M, smiles]

[A turns in circle] look/

You're gonna get punched
right in the gut
[Provocative tone].

Ya wanna fight? [Loudly]

[A strikes fighter's
pose, legs apart, arms
at shoulder level, fist
raised toward M]

[M smiles at A]

[A swats at M, kicks
sofa next to M]

[A turns around and [Laughs]
runs down hallway]

Huh?
Do ya? [Laughs].

Peggy*: She knows how
obviously [Laughs].

[A runs back into
living room]

Amy.

Do ya?

[A turns away] [Laughs]

Lemme see your fist?

[A turns and faces M,
raises chin defiantly]

[A falls to floor] oh uhp/

[A jumps toward sofa] [Shrieks]

(*Peggyとは調査者Millerのこと。)

この例では、“gimme cup”とsodaを欲しがらる子供を母親がにらみつけたうえ、突き放し、飲もうとするところを脅かすことからteasingが始まる。母親は、“You're gonna get punched right in the gut.”とか“You wanna fight?” “Do ya?”などの言葉で脅し、子供は、拳を上げたり、あごを突き出すなどの動作で脅し返すというやりとりが続き、最後には子供が床に倒れ、半ばあきらめつつ笑いながらソファーにジャンプすることで収拾する。teasingが決してシリアスではないということは、笑いながら会話が進行していることからわかる。しかし、その始まりを見るとわかるように、母親の口調はたいへんきつく、わずか1歳の子供に対する私たち日

本人の母親達の接し方とは大きく異なっているように感じられる。もし、子供が何かを飲もうとしたら、私達ならきっと、「○○ちゃん、何が欲しいの？ あらっ、そう。」などと猫なで声で接するのではないだろうか。

Millerによって観察された3人の子供達は、母親のteasingに対して、いじいじしたりぐずぐず訴えるようなことはあまりなかったということである。いじいじした時の母親達の対応は、同情を示す場合から“sissy”と侮辱するにいたるまで様々だったということだ。この階級の特徴なのかもしれないが、ほんの1～2歳の子供なのにめめめせず、母親の態度にも増して、子供もたいへん強く、しっかりしているなという印象を受ける。すでに「自立の芽生え」を感じさせるのである。

では、母親達にとってteasingが意味するものは何か。teasingは子供達が大きくなって社会に出た時に必要な処世術を伝授する一つの場であると考え、実社会での悪ガキの役を危険の少ない家庭内で母親が演じることにより、子供達にどうやってそれに立ち向かうかを教えている。そんな母親達はいったいどんな価値観を持っているのだろうか。Noraの言葉を借りれば、

“Teasing will make her want to learn on her own, it encourages her to be independent, it makes her mad, gives me a chance to encourage her if she has trouble (defending her claims or displaying her ability). I say, ‘You’re still little. It’s all right.’” (Miller, 1986, p.204)

また、Marleneの言葉を借りれば、

... if you sit down and try to tell your kid, you know, “Hey” you know, “they’re gonna punch you, you punch them.” And by acting this out with them. By pushing them down and lettin them feel theirself hit the floor, whatever. I think it toughens them up. And I think that’s good for a girl nowadays, anyway, because with everything that’s goin on, even a girl has to defend herself. And, yeah, I think that’s good. (Miller, 1986, p.205)

ということである。母親達は自立することの大切さと自己主張の必要性を痛感し、相手をやり返すほどの強さが女の子にも必要であると思っているようだ。

2. アメリカ社会の根底にあるもの

ここで紹介したteasingというのは、極端な例であるが、アメリカ社会には、この母親達の価値観につながるものの考え方があるように思われる。

松本(1994)は、日米文化の特質を、自らの考案であるCultural Transformational Rule (CTR)の志向に基づき、次の8つに対比している。

CTRの志向

日 本	⇔	アメリカ
1 謙遜 (畏れ多くてへりくだる)	⇔	対等 (親しく対等に振舞う)
2 集団 (みんな一諾にする)	⇔	個人 (私一人です)
3 依存 (甘え合う)	⇔	自立 (自立する)
4 形式 (型通りにする)	⇔	自由 (自由にする)
5 調和 (相手にあわせる)	⇔	主張 (自分を主張する)
6 自然 (自然の流れに任す)	⇔	人為 (状況を変える)
7 悲観 (悲観する)	⇔	楽観 (楽観する)
8 緊張 (力を入れる)	⇔	弛緩 (力を抜く)

(松本, 1994, p.156)

このうち、teasingの中で母親達が持っている価値観につながるのは、1, 3, 5 の、アメリカの対等・自立・主張の意識であると考えられる。相手とは常に対等であり、自分一人で自立しようとし、相手と対立してでも自分を主張しようとする意識がアメリカ社会にはあり、日常会話の中にもそれが表出しているように思われる。これは、謙遜・依存・調和という、日本の察しの文化の精神性とは相反する価値観ではないだろうか。

teasing interactionでみたように、第一言語を習得する場合の大きな特徴として、日・米、その他様々な文化の中で育つ子供達は、言葉の背景にあるこういった社会の価値観も同時に獲得していくのである。

3. 公立小学校での英語教育導入を考える

これまでみてきた、言葉とその言葉の背景にある価値観の獲得の観点から公立小学校英語教育導入を考えてみたいと思う。

1996年7月の中央教育審議会第一次答申では、小学校における外国語教育の扱いに関して、次のように述べられている。

(小学校における外国語の扱い)

小学校段階において、外国語教育にどのように取り組むかは非常に重要な検討課題である。

本審議会においても、研究開発学校での研究成果などを参考にし、また専門家からのヒアリングを行うなどして、種々検討を行った。その結果、小学校における外国語教育については、教科として一律に実施する方法は採らないが、国際理解教育の一環として、「総合的な学習の時間」を活用したり、特別活動などの時間において、学校や地域の実態等にに応じて、子供たちに外国語、たとえば英会話等に触れる機会や、外国の生活・文化などに慣れ親しむ機会を持たせることができるようにすることが適当であると考えた。

小学校段階から外国語教育を教科として一律に実施することについては、外国語の発音を身に付ける点において、また中学校以後の外国語教育の効果を高める点などにおいて、メリットがあるものの、小学校の児童の学習負担の増大の問題、小学校での教育内容の厳

選・授業時数の縮減を実施していくこととの関連の問題、小学校段階では国語の能力の育成が重要であり、外国語教育については中学校以降の改善で対応することが大切と考えたことなどから、上記の結論に至ったところである。

(『小学校からの外国語教育』樋口忠彦ほか編、1997、研究社出版)

上記の答申の指針をうけ、公立小学校へも英語教育の波が押し寄せつつある。早期英語教育を行う利点としては、一般に、次の二点が挙げられる。

- A 流暢な英語運用能力
- B 異文化への柔軟性

teasingを通してみてきた、言葉と言葉の背景にある価値観の観点から、それぞれに対する疑問を次に投げかけた。

Aに対する疑問として、中山(1997)が、「イギリス英語やアメリカ英語を必要以上に物まねすれば、日本人としての民族・社会言語学的な(ethno-sociolinguistic)アイデンティティを喪失する危険性もあり、避けたほうが賢明である。an indigenous and/or ethnic variety of “valid English” (その地域や民族固有の「妥当な英語」)でいいのである。」と述べているように、私たち日本人が皆、アメリカ人のように発音し、さらには、彼らのようなオーバーアクションで話し、先のteasingでみたように攻撃的なまでの自己主張をすることが、本当に子供達に求められていることなのだろうか。たとえば、英語教師や英語でビジネスをしている人々の発音が悪いのは不利であろうが、公立小学校・全国民を対象とした場合、将来、皆がネイティブスピーカーのように英語を話せることは、本当に必要なのだろうか。それより、小学生のこの時期、自分達日本人はどういう民族で、隣の国や世界にはどういった人々が生きているのかを知ることのほうが将来役立つのではないだろうか。

また、Bに対する疑問として、箕浦(1991)は、子供達は9~14,15歳ごろ文化文法を体得すると言っており、それ以前はすべての文化に柔軟であると思われるが、逆に、その時期に極端に英語にさらされるということは、必要以上に英米文化を受け入れることになり、答申で述べている「多様な異文化の生活・習慣・価値観」を尊重する態度の育成とは相反する方向を目指すことにはならないだろうか。

たとえば、ある私立小学校で行われているトータル イマーション プログラムでは、当然、英語とともに、その教師の持つ英米文化の価値観が子供達の中に浸透していくと思われる。公立小学校でも、英語が導入されれば、先にみたアメリカ的価値観が、少なからず入ってくる可能性は十分に考えられ、英語偏重主義に走る危険性がある。

4. まとめ

第二次世界大戦敗戦後、これまで信じてきたものが覆えされ、さらに、英米偏重主義により、日本的価値観が否定されるようなことになったら、私達日本人のidentityというものは、どこへ行ってしまふのだろう。日本人の根底にある価値観は、teasingでみたアメリカ人の根底にある価値観とは180度異なるものである。日米の価値観の違いに対して、どちらがすばらしいと判断を下すのはおかしい。お互いを知り、理解し合うことが私達人類に課せられた課題である。母語

である日本語を勉強中の小学生にとって、異文化を知り、理解し合うためには、日本語の背景にある日本人のものの考え方を知ることが最優先である。第一言語習得において、子供は言語と同時に文化を学んでいるのである。確かに、アメリカは、合理的で、自由な上、主張もはっきりしていて、「うらやましいな、こうありたいな。」とその面だけを浮き彫りにして賞賛しがちなのだが、時と場合によっては、日本の察しの思いやりも私達日本人には必要である。そして、日本と英米の両方の文化の違いや共通点を指摘し、その両方の良さを教えられるのが英語教師だと思う。さらには、子供達の目を世界中に向けさせることが、今後、すべての教師に課せられた課題ではないだろうか。

最後に、日本における公立小学校英語教育の目標の一つは、子供達に異質なものに触れさせ、いろいろなものの考え方を示し、広い視野を持たせることにより、改めて日本人としての自分達を自覚させ、ますます進むであろう異文化共存の21世紀に、日本人として自信を持って生きられる子供達を育てることであると思う。今や、英語を話せないと世の中から取り残されるのではないかという危機感から、我先に飛びつくという現状であるが、いったい、英語を通して、日本人である子供達に何を教えるべきなのか。英語とともにその背景にある価値観も受け入れて教え込むべきなのだろうか。公立小学校英語教育導入が叫ばれる今、英語を教える者として、今一度考えたい。

*本稿は、LLA中部支部 1997年度第2回支部研究大会（1997年11月8日 於豊橋技術科学大学）における口頭発表に加筆修正したものである。

参考文献

<英語文献>

- Miller, P. (1986). "Teasing as language socialization and verbal play in a white-working class community." In Schieffelin & Ochs. (eds.) *Language Socialization Across Cultures*. Cambridge University Press.
- Ota, A. (1996). "Teasing as Language Socialization." *Language & Literature (Japan)*, vol.5. Graduate School of English, Aichi Shukutoku University.

<日本語文献>

- 中山行弘 (1997). 「ボーダーレス時代の外国語の役割－「多文化英語 (ME) のすすめ」『小学校からの外国語教育』(樋口忠彦ほか編) 研究社出版より。
- 樋口忠彦ほか編 (1997). 『小学校からの外国語教育』 研究社出版。
- 松本青也 (1994). 『日米文化の特質 文化変形規則(CTR)をめぐる』 研究社出版。
- 箕浦康子 (1991). 『子供の異文化体験』 思索社。